
山を越えて

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山を越えて

【Nコード】

N9603M

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ドイツ降伏後同期を乗せてアルプスを越えて補給に向かうことになった。だが積荷は輸送機の搭載量をオーバーしていて。少し変わった戦記ものです。

第一章

山を越えて

ダグラスⅡマックローン大尉とマイクⅡガンナー大尉はウエストポイントでは同期であった。今はパイロットとしてイタリアにいる。乗っている機体は輸送機だ。C-47というやたらと使われる輸送機のパイロットをしている。

丁度ドイツが降伏した直後だ。戦争は何とか終わった。

しかしそれで二人の仕事が終わったわけではない。基地の司令に呼ばれてこう告げられたのだ。

「君達の今度の任務はだ」

「休暇ですか？」

「それともボーナスですか？」

「それはこの仕事の後だ」

下らないジョークには下らないジョークが返って来た。

「今回の仕事は輸送だがものだけでなくだ」

「人もですか？」

「それもですね」

「その通りだ」

司令の言葉は実にシンプルだった。人員輸送もよくある仕事だ。

二人にとってはこうした仕事はいつものことなのでそれを聞いてもまずは何とも思わなかった。

「頼めるか？」

「頼まなかったらどうなるんですか？」

「その場合は」

二人の問いはまずそこからだった。

「頼んだらボーナスと休暇で」

「それを断ったら」

「特別休暇だ」

司令の返答はこれであつた。

「営巢でゆつくりと休んでもらうことになる。軍法会議で人に囲まれることは好きか？」

「いえ、女の子に囲まれるのならともかく」

「むさ苦しいおっさん連中に囲まれる趣味はありません」

二人の今度の返事はこれであつた。

「ですからそれは」

「遠慮します」

「よし、それならいい」

司令は二人の言葉を聞いて納得した。そうしてだつた。

「ではその人員だが」

「それは誰ですか？」

「將軍閣下で？」

「いや、多分君達を知っている人間だ」

司令は二人にこう言つてきたのである。

「それもかなりな」

「俺達がかかり知つてゐるつていうと」

「一体」

「ああ、来たな」

ここで扉をノックする音が聞こえてきた。司令はそれを聞いて言うのだった。

するとだ。二人と同年齢のアメリカ陸軍の士官の軍服を来た男が来た。それは。

「あれっ、オーウェンじゃないか」

「イタリアにいたのか」

マックローンもガンナーも彼の顔を見て述べた。士官学校の同期でしかも階級も同じだ。その彼が入つて来たのである。

「確か参謀になつたんじゃないのか？」

「確か」

「それでドイツに行くことになつたのだ」

そうだったと話すのである。

「だからそれでだ」

「俺達がいいつをドイツに送るんですか」

「つていうと配属が替わったんですね」

「これまではローマにいたがドイツに行くことになった」

このことも話された。

「それで君達に彼をドイツまで送ってもらいたいのだ」

「わかりました。それじゃあ」

「今すぐですね」

「物資はもう搭載してある」

話の展開は早かった。それは既にだというのだ。

そうしてだ。さらに話されるのだった。

「ではすぐに三人で行ってくれ」

「わかりました、それじゃあ」

「機内で再会を祝うとします」

こうして二人はオーウェルと物資をドイツまで送ることになった。早速アルプスを越えてドイツに向かうことになった。その機内でのことである。

「なあ」

「何だ？」

「どうした？」

マックローンとガンナーはオーウェルの言葉に問うた。彼は後ろの席にいて操縦する二人は言うまでもなく操縦席に並んで座っている。そのうえで会話に入るのだった。

第二章

「今までずっとあの基地にいたのか」

「ああ、アフリカ戦線からな」

「シチリアに上陸して攻め上がるのと一緒にな」

二人はこうオーウェルに話していく。

「それであの基地にいたんだよ」

「ミラノのな」

「そうか。俺は暫くイギリスにいた」

オーウェルはそうだったというのだ。

「いいよな、イタリアで」

「何だ？美人が多いからか？」

「その分気が強いぜ、イタリア女は」

「それだけじゃないさ。イギリスはな」

ここでオーウェルは苦々しい顔になった。そのうえで言うのだった。

「飯がまずい。洒落にならない位にな」

「そんなにまずいのか？」

「イギリスの食い物は」

「俺達アメリカ人も色々言われてるみたいだけれどな」

アメリカの食べ物物の評判も聞いていることには聞いていたのである。それが決して芳しくないことも知ってはいる。

しかしである。ここでオーウェルはさらに話すのだった。

「何処をどうやったらあそこまでまずくできるのかわからん」

「そこまでか」

「そんなにまずかったのか」

「イタリアは美味いからいいな」

今度はイタリアの食べ物のことを話すのだった。

「ローマに来てびっくりしたよ」

「そんなに」

「凄い目に逢ったんだな」

「B-17の基地じゃおかげで基地の飯ばかり食っていた」

そうだったというのだ。なおB-17の基地はイギリスにあった。そこからドイツ本土に向かい爆撃を行っていたのである。

「イギリスの飯はまずくてとてもだったからな」

「そうか、それでか」

「そうだよ。けれどイタリアはいいよな」

あらためて言うオーウェルだった。

「飯は美味い」

「そうだよな。やっぱり飯が美味くないとな」

「どうしようもないからな」

「全くだよ。それでドイツか」

オーウェルは自分の次の配属先についても考えを及ぼせた。そのうえで言うのだった。

「飯はどうか」

「流石にイギリスよりましだろ」

「ソーセージにビールが待ってるぜ」

「そうか。あとはモーゼルワインだよな」

「ああ、たっぷり飲めよ」

「今度会った時に感想聞くからな」

こんなやり取りをしながらアルプスを越えようとする。いよいよその青と白の世界に入った。しかしここで、であった。

ふとだ。マックローンが言うのだった。

「何かよ」

「ああ、そうだよな」

ガンナーも深刻な顔で彼に言葉を返す。その雲から顔を出す山々を見ながらだ。

「重いよな、何か」

「機体かな」

「俺はそこまで太ってないぞ」

オーウェルがすぐに行ってきた。

「言っておくがな」

「いや、それはわかってるからな」

「気にするな」

冗談に軽い言葉で返した。この辺りは流石に同期であった。

しかしそれでもだ。機体の重さは感じていた。それで二人はオーウェルに対して言うのだった。

「なあ、ちよつとな」

「搭載している物資を見に行ってくれるか？」

こう彼に頼むのである。

「ちよつとな」

「いいか？」

「ああ、わかった」

オーウェルも二人の言葉に快く頷いた。

「それじゃあな」

「頼むな」

「それでな」

こうして彼は一旦後ろの搭載庫に向かった。そして暫くして極めて深刻な顔で戻って来た。そのうえで二人に対して言うのであった。

「なあ」

「ああ、どうだった？」

「どんな感じだった？」

「C-47の搭載量って大体二・七トンだったよな」

二人にこのことを問うのだった。

第三章

「確かそうだったよな」

「ああ、大体な」

「それ位だ」

二人もそうだと答えるのだった。

「まあ頑丈な機体だからな」

「多少の無理は利くがな」

「四トンあるんだけれどな」

ここで彼が告げた搭載量はこれだけだった。

「それはもう無理だよな」

「・・・・・・おい」

「四トンって何だ？」

二人は彼の言葉を聞いていた。それまでは操縦の為に前を見ていた。しかし思わずその顔をそれぞれ彼に向けたのである。

「ジョークにしても笑えないぞ」

「チャップリンならもつと気の利いたこと言っぞ」

「ジョークでこんなこと言うか」

しかしオーウェルは真顔であった。

「本当に五トン分あるんだよ」

「おい、これからアルプス越えるんだぞ」

「何千メートルの高さなんだぞ」

二人はあらためてオーウェルに告げた。

「それだけ積んでアルプスを越えられるか」

「絶対に無理だぞそんなの」

「どうする？おい」

オーウェルは今度は顔を青くさせて二人に問うた。

「これってよ」

「どうするって」

「行くしかないだろ」

ガンナーが言ってきた。

「御前はドイツに行くしかないんだろっ?」

「ああ」

オーウェルはガンナーのその問いにくくりと頷いた。

「そこが新しい配属先だからな」

「じゃあそれしかないんだよ」

また言うガンナーだった。

「ここを越えるしかない」

「今アルプスをか」

「やってみるしかないな」

マックローンも言った。

「ここはな」

「けれどな、山にぶつかつたらどうなるんだ?」

「今よりもっと上に行けるぜ」

マックローンはわざとジョークで同期の質問に答えた。

「天使がお出迎えしてくれてな」

「なあ、マックローン」

「どうした?」

「御前ウエストポイントの時からジョークが下手だったがな」

彼は全く笑わずに述べていた。

「さらに下手になつたんだな」

「そうか」

「そうだよ。俺達が行くのは地獄だろ」

そついうオーウェルもジョークは下手だった。

「悪いことばかりしてるからな」

「じゃあそつちに行く覚悟はしておくか」

「そつした方がいいだろ。とにかくアルプスは越えるんだな」

「ああ、越える」

それは絶対だというのだ。

「幸いドイツ軍ももういないしな」

「それだけが不幸中の幸いだな」

ガンナーはこのことだけはいいと思っていた。

「せめてのな」

「輸送機を敵の中に放り込む馬鹿がいるか」

マックローンはそれはないと言った。軍事の常識である。

「そうだろうが」

「まあ普通はそうだな」

「それはな」

マックローンの今の言葉にガンナーとオーウェルも頷く。

「それでもだぜ、今はな」

「四トンも積んでアルプスだからな」

二人はそれぞれ首を捻って言った。

「これはやばいだろ」

「高度はあがるか？」

「いや、無理だ」

マックローンは二人に話す。絶望的な状況がさらに深刻なものになった。

「これ以上はだ」

「前の山だけれどな」

オーウェルはその自分達の前に見えているその山を指差しながら話す。窓から見えるその山は見事な三角形をしている。かなり険しい岩山である。

第四章

「この機の今の高度より高いよな」

「どう見てもな」

「大丈夫じゃないだろ」

オーウェルはこうマックローンに告げた。

「それじゃあよ」

「越えるだけじゃないからな」

これがマックローンの今度の言葉だった。

「それはな」

「越えるだけじゃか」

「ああ、越えるだけじゃないだろ」

こう言うのである。

「だからな。今はな」

「それでも行くんだな」

「そうする」

その決意は変わらないというのだ。

「何があってもだ」

「そうだな。辿り着ければボーナスと休暇だ」

ガンナーはあえて前向きに考えた。考えることにしたのだ。

「それで引き返したらだ」

「それはなしだな。流石に軍法会議はないだろうがな」

マックローンも彼に応える。

「任務を受けることは受けたんだからな」

「なあ」

そしてここでオーウェルが二人に言ってきた。

「パラシュートはあるか？」

「ああ、一応御前の分もあるからな」

「それは安心してくれ」

「じゃあ今から降りる」

彼は真顔で話した。

「それで歩いてドイツまで行く。この下にも連合軍がいるだろ」

「馬鹿言え、アルプスだぞ」

「そんなところに降りても死ぬぞ」

二人は彼の今の言葉に即座に言い返した。

「どれだけ寒いと思ってるんだ？」

「しかもクレバスもあるし食い物も碌にないだろ」

「しかし俺がいなくなったらそれだけ重さが減るだろ」

「今更人間一人位どうってこともないんだよ」

「そうだよ」

その通りだというのである。

「だからな。ここにいろ」

「一緒にドイツまで行くぞ」

「ドイツまでか」

「ビールにソーセージだ」

「いいな」

今度話に出してきたのだけはそれだった。ドイツといえばその二つであつた。

「それを好きなだけ飲んで食うぞ」

「久し振りに三人一緒にな」

「悪いな」

二人の言葉を聞いてオーウェルも遂に頷いた。

「それじゃあな」

「ああ、行くぞ」

「何があつてもな」

こうしてであつた。彼等はこのままアルプスを越えることを決意した。まずは目の前の山だった。

その山は右に曲がって横を通り過ぎた。それによって越えたのだ。まずはこうしてだ」

「上手くいったな」

「とりあえずはな」

操縦するマックローンは前を見据えたままガンナーに応えた。

「これで一つだな」

「また前に出て来たぞ」

オーウェルが言ってきた。見ればまた前に山があった。

それを見てだ。マックローンは今度は左に切った。それでその山もかわした。

また出て来た。今度は右であった。

しかしそのすぐ前にであった、またしても山があった。それも今度のはかなり横広かった。

その山を見てである。オーウェルは不安になった顔でマックローンに問うた。

「いけるか？」

「今度の山はか」

「ああ、いけるか」

このことを彼に問うたのである。

「今度は」

「心配するな」

これが彼の返答だった。

「絶対にやれる」

「絶対なんだな」

「ああ、何があってもな」

ここではジョークはなかった。まるでガンマン同士の決闘の様に真剣になっている。

第五章

そうしてだった。マックローンは大きく右に操縦桿を動かした。そうするとだ。

機体はそのまま大きく右に動く。しかし。

その動きを見てガンナーは言った。

「鈍いな」

「四トンだからな」

マックローンはやはりそこに理由があるというのだ。

「それは重いだろうな」

「それでもいけるんだな」

「ああ、いける」

しかしそれはというのがあった。

「だから安心しろ」

「わかった」

彼のその言葉に今度も頷くオーウェルだった。そしてその動きを見守る。

山が至近まで来た。今にも触れそうだった。

翼の左端が今にも触れそうになる。しかしだった。

紙一重であった。今は触れなかった。しかしである。

右にも山が出て来てだ。山と山の間にいった。

何とか通れるかどうかだった。しかしそれでもマックローンは冷

静だった。

「いくぞ」

「いくんだな」

「いいんだな」

「多分ここがクライマックスだぜ」

にやりともせずに出した言葉だ。

「ここがな」

「この谷を越えるかどうかなんだな」

「つまりは」

「ああ、超えるっていうかな」

言葉が訂正された。それだけの冷静さはマックローンにはまだあった。

「通り抜けるだな」

「通り抜けるか」

「言っておくけれどはじめてだからな」

マックローンのその顔には緊張が宿っていた。

「こういう場所を通り抜けるのはな」

「そうだよな、それは俺もだ」

「こういうのはか」

ガンナーも言いオーウェルも緊張の極みにある顔で述べた。

「はじめてなんだな」

「正直訓練でもなかった」

まさにそうだというのだ。

「まあやってみる」

「頼んだぜ、おい」

「こうなったらな」

二人はここで彼に対して言うのだった。

「命は預けたからな」

「御前にな」

「じゃあドイツで美味いビールとソーセイジ奢ってくれよ」

「それでいいんならな」

「好きなだけ飲んで食え」

これが二人の返答だった。二人も今は腹を括っていた。とにかく今は生きなくてはならない、そしてその生きるということを彼に預けたのだ。

三人、とりわけマックローンが緊張の極みにある中でだ。その谷に入る。まさにC-47が一機何とか通り抜けられる広さであった。

そこを通る。左右の翼にそれぞれ山が当たろうとする。こすれる音が聞こえそうだった。

「触れてるか？」

「いや、大丈夫だ」

不安な声を出すオーウェルにガンナーが答える。

「触れてもいない」

「そうか」

「ただ、危ないことは危ないな」

それでもこのことは否定できなかった。

「いいか、本当に気をつけろよ」

「わかってるさ」

「それはな」

こう言い合ってそのうえでだ。谷を通っていく。そのC-47が一機何とか通り抜けられる広さがそのまま続く。その中を通っていく。

谷は思ったより奥行きがあった。少なくとも三人にはそう思えるものだった。三人は全身から冷や汗を流しながら先に進んでいく。そうしてようやく出口が見えてきた。

「いよいよだな」

「ああ」

「そうだな」

三人はとりあえず希望を見た。

第六章

そのまま進んでいく。しかしだった。

まだ谷は続いていた。その極端な狭い峡谷がだ。

その中をまさに紙一重で進んでいく。速い筈なのに時間の流れは長く感じた。これは三人に共通することだった。

「まだか？」

「もう少しだ」

ガンナーに答えるマックローンだった。

「もう少しだからな」

「そうか、じゃあもう少し頑張ってくれよ」

「わかっている」

こうしてそのまま通っていく。そしてやっとであった。

まず機首が出た。続いて主翼がだ。谷を出たのである。

それでまずはほっと胸を撫で下ろす三人だった。しかしである。

突如尾翼が落ちた。それで肝を冷やした。

「！？」

「どうした！？」

「気流だ」

こう答えるマックローンだった。

「今のは本当に驚いた」

「あ、ああ」

「かなりな」

ここでまた冷や汗を流す二人だった。マックローンもだ。

「危ないところだったな」

「本当にな」

「死ぬところだった」

こう言い合うのだった。しかしその尾翼も出たのだった。

こうして虎口は脱した。それでようやく安堵の息を漏らした。

「助かったな」

「ああ……」

「生き残った……」

まだ操縦はしているがほう、と言葉を出したのである。

「もうこんな思いはな」

「沢山だよな」

「同感だよ」

「全く」

最後の言葉は三人同時に出したものだっ

「誰があれだけ搭載したんだよ」

「ただでさえアルプスは越えるのが難しいってのにな」

「それでも。助かったな」

こうそれぞれ話し合っ

「さて、それじゃあな」

「ドイツだな」

「とりあえずはな」

「おい、オーウェル」

マックローンはここでオーウェルに問うた。

「御前の基地は何処なんだ？」

「何処だつて？」

「ああ、何処なんだ？」

それを彼に問うたのである。今更ではあるがだ。

「ドイツの何処なんだ？ベルリンか？」

「ベルリンは赤軍が占領してるさ」

ソ連軍である。ベルリンは彼等が陥落させたのである。

「だからそこじゃない」

「じゃあ何処だ？」

「ミュンヘンだ」

そこだというのだ。

「ミュンヘンの基地に配属になった」

「そうか」

「ああ、そうだ」

また話すオーウェルだった。

「そこなんだよ」

「そうか。じゃあすぐだな」

マックローンはその顔が次第に元に戻ってきていた。その今にも死にそうな蒼白な顔からだ。次第に元に戻ってきているのであった。そうしてだ。その顔でだ。彼は言うのだった。

「ミュンヘンのビールとソーセイジ頼むぜ」

「わかってるさ」

ガンナーが笑顔で彼に応える。

第七章

「それじゃあな、好きなだけ食えよ」

「ああ、飲むのと食うのには自信があるんだ」

「こうも話すのだった。」

「それじゃあな」

「さて、ミュンヘンに着いたらだ」

「ここでオーウェルの顔が陰しくなった。」

「文句の十や二十も言わないとな」

「ああ、全くだ」

「本当にな」

二人も厳しい顔で言葉を返した。

「四トンも積みやがってな」

「これだけ積みやがって」

「何考えてるんだ」

「基地に帰っても文句を言ってやる」

「マックローンとガンナーも口々に言う。」

「こうなったらな」

「言わないでおれるかよ」

「こんなことは守らないといけないんだよ」

「オーウェルも二人に続いた。」

「安全の為にもな」

「ああ、ミュンヘンに着いたらだ」

「大暴れしてやろうぜ」

「話はこれからだ」

こんな話をしながら春のドイツに向かうのだった。戦いが終わった春のドイツにだ。そうしてミュンヘンに着くとであった。三人は惘然とした顔で木のテーブルに着いていた。場所はミュンヘンの空港の酒場である。そこでビールにソーセージを好きなだけ飲み頼張

っている。しかしであつた。

三人共憮然とした顔になっている。そのうえで言うのである。

「なあ」

「ああ」

「何だ？」

ガンナーとオーウェルがマッククローン言葉に応えた。

「これが俺達の積んできたやつだよな」

「ああ、そうだ」

「それがな」

このビールとソーセージがだというのである。

「それがなんだよ」

「実はな」

「ドイツのはねえのかよ」

マッククローンは飲み慣れ食べ慣れたそのビールとソーセージを口の中に入れながらまた二人に問うた。あまり面白くはなさそうな顔である。

「本場のドイツのはよ」

「戦争に負けて食うどころじゃないらしい」

「もうどうやって生きるかって問題らしいぞ」

「ビールやソーセージどころじゃないってか」

それを聞いてあらためて頷いた彼だった。

「そういうことなんだな」

「ああ、つまりそういうことさ」

「だからこうしてわざわざ運んできたってわけだ」

「何なんだよ、そりゃ」

マッククローンは二人の話をここまで聞いたうえでうんざりしたような顔で述べた。

「全然面白くも何ともねえじゃねえかよ、俺はドイツのを楽しみでここに来たんだぜ」

「まあ気持ちはわかるがな」

「そう言うな」

不平不満だらけの彼をガンナーとオーウェルが宥める。

「俺達の奢りだからな」

「何ならいつものスパムでいいか？」

「いや、それはいい」

スパムはアメリカ軍の代名詞の一つともなっていた。とにかくやたら出て来るのである。それで皆いい加減食べ飽きていたのである。

「まあいいか。たらゆく飲めて食えるんだからな」

「ああ。じゃあ俺達はイタリアに戻って」

「俺はここに残るからな」

ガンナーとオーウェルがそれぞれ述べた。

「今度は普通の重さの貨物にするように言うからな」

「もうあんな思いはこりこりだぜ」

「全くだ」

三人の同期の考えは見事なまでに一致した。

「本当に死ぬかと思っただからな」

「アルプスに死す」

「綺麗なのは言葉だけだ」

まさに言葉だけだった。三人にとっては冗談ではない話である。

「そんなことになるよりはな」

「こうしてアメリカの飲み慣れて食い慣れたビールとソーセージを
楽しんで」

「賑やかにやる方がいいさ」

ここでも考えが一致していた。完全にである。

そしてあらためて乾杯するのだった。同期の再会と何とか生きられたこととビール、ソーセージにだ。その三つのことに乾杯し大きなジョッキの中のそのビールを勢いよく飲み干すのだった。そのビールは実に美味かった。

山を越えて

完

2
0
1
0
・
2
・
1
1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9603m/>

山を越えて

2010年10月8日13時44分発行